

第79回～第131回

☆放送時間☆

期間	曜日	時間帯
昭和48年4月2日～ 昭和49年4月1日	月	21時00分～ 21時55分

司会:山口淑子 (第79回～96回、99回～131回)
藤原弘達 (第79回～131回)
森光子 (第97回)
高島忠夫 (第98回)

☆凡例☆

①サブタイトル・放送回	②出演者
③曲目(歌唱者)	④放送概要

昭和48年

昭和48年4月2日

- ①「石原裕次郎ビッグヒットを唄う／藤原弘達歌謡放談」 # 79
- ②石原裕次郎、ペギー葉山、坂本九、藤山一郎
- ③不明
- ④詳細不明

昭和48年4月9日

- ①「愛のヒット集／藤原弘達歌謡放談」 # 80
- ②近江俊郎、フランク永井、佐良直美、藤圭子、五木ひろし
- ③「山小舎の灯」(近江)、「緑の牧場」(近江)、「南の薔薇」(近江)、「思い出は雲に似て」(近江)、「有楽町で逢いましょう」(フランク)、「夜霧に消えたチャコ」(フランク)、「世界は二人のために」(佐良)、「陽が当たるまで」(佐良)、「夢は夜ひらく」(藤)、「よこはまたそがれ」(五木)、「霧の出船」(五木)
- ④ 今回は、ベテラン近江俊郎のなつかしのラジオ歌謡ヒット曲集、フランク永井ヒット曲メドレー、藤原弘達が分析する大正末期から昭和初期にかけての流行歌と世相のかかわり合いなどの内容。

まず、五木ひろしの「よこはまたそがれ」、藤圭子の「夢は夜ひらく」、佐良直美の「世界は二人のために」で幕をかけたあと、フランクが「有楽町で逢いましょう」「夜霧に消えたチャコ」ほかを歌う。

近江が自分で選んだ一番好きなラジオ歌謡ヒット曲集は「山小舎の灯」「緑の牧場」「南の薔薇」「思い出は雲に似て」の4曲。

新曲コーナーは、佐良が「陽が当たるまで」、五木が「霧の出船」などを歌う。

昭和48年4月16日

- ①「艶歌・花の饗宴」 # 81
- ②北島三郎、水前寺清子、青江三奈、美川憲一
- ③不明
- ④詳細不明

昭和48年4月23日

- ①「忘れじの歌・古関裕而名曲選」 # 82
- ②伊藤久男、藤山一郎、渡辺はま子、奈良光枝、織井茂子
- ③不明
- ④ 東京・福岡・名古屋・北海道では、プロ野球「大洋対巨人」を放送。当日のテレビ欄には野球中止の場合に「上原謙思い出の映画主題歌集」を放送すると記載されていたが、試合中止にならなかったため放送されなかった。

大阪はプロ野球ではなく、「忘れじの歌・古関裕而名曲選」(# 67)を再放送した。

この日を放送回にカウントしないと、# 100が「100回記念特集」から外れてしまうため、カウントしている。

昭和48年4月30日

- ①「上原謙思い出の映画主題歌集」 # 83
- ②上原謙、加山雄三、春日八郎、坂本スミ子、三條町子、東京ロマンチカ
- ③不明
- ④詳細不明

昭和48年5月7日

- ①「森繁久弥・あゝ戦友」 # 84
- ②森繁久弥、島倉千代子、都はるみ、千昌夫
- ③不明
- ④ 同年6月26日付朝日新聞西部版夕刊によると、司会の山口は得意の中国語を披露し、「ニイ・ハオ」に始まり李香蘭時代や満州時代の思い出話がつきず、録画終了後、「この番組で私の中国語講座開いてくれないかしら……」という一幕もあったとのこと。

昭和48年5月14日

- ①「艶姿！演歌日本調」 # 85
- ②灰田勝彦、尾崎紀世彦、由紀さおり、松尾和子、松平直樹とブルーロマン
- ③「新雪」(灰田)、「湯島の白梅」(尾崎)、「明治一代女」(由紀・松尾)、「島の娘」(由紀・松尾)
- ④ 今夜は、ベテランの灰田勝彦をはじめ、松尾和子、由紀さおり、尾崎紀世彦、元マヒナスターズのメンバーだった松平直樹らの出演で、“艶姿！演歌日本調”“灰田勝彦・青春哀歌”“ムード歌謡特集”の三部構成。

第一部“艶姿！演歌日本調”では、由紀と松尾がそれぞれ艶やかな芸者姿で「明治一代女」「島の娘」を、尾崎は書生姿で「湯島の白梅」を歌う。(なお、「明治一代女」「島の娘」は、デュエットではなくソロの可能性あり。)

第二部は、“灰田勝彦・青春哀歌”で、藤原弘達が当時の世相とともに分析する。

灰田は昭和17年のヒット曲「新雪」を歌うが、本番の後、司会の山口淑子の「それにしてもお若いですね」に「いやあなたも」と灰田。ついでに由紀にまで「お若いですね」とやり、「私は二十三年生れ。皆さまと関係ございません」。

昭和48年5月21日

- ①「ご存じマドロス演歌」 # 86
- ②三橋美智也、都はるみ、五月みどり、宮史郎とびんからトリオ
- ③「リンゴ村から」(三橋)、「達者でナ」(三橋)、「あこがれのハワイ航路」(不明)、「涙の連絡船」(不明)
- ④ デビュー二十年の三橋美智也、同じく十年の都はるみ、カムバックした五月みどり、そして苦節十年、花咲いたびんからトリオの登場。

第一部は、都はるみ、びんからトリオほかの「ご存じマドロス演歌」で、「あこがれのハワイ航路」

「涙の連絡船」など、マドロスもの名曲の特集。

第二部は“三橋美智也ふるさとを唄う”で、「リンゴ村から」「達者でナ」など、ふるさとを歌ったヒット曲。

第三部は“お座敷談義”。同年5月23日付読売新聞東京版朝刊では、批評家の藤原弘達が芸者を最大級の賛辞で礼賛していたことについて、「ただけぬ時代錯誤的放言」と題した以下の記者の批評記事が載っている。

(前略) いつもそうなのか、その夜の「にっぽんの歌」は演歌ばかりずらりだったものの、正直いって面白かったのである。断っておくが、私はヨ、ナ抜きメロディーはシンから好きでないから、演歌にひかれたわけではない。ゲストの批評家センスの発言とテレビとしての、その処理の仕方に興味を持ったのだ。

それは“お座敷ソング”コーナーのときである。センス、そのとき、芸者を最大級の賛辞で礼賛なさる。いかにもそこに、日本的風習と心情の典型があるかのごとく、芸者は日本の無形文化財だとし、それを非難し、放棄しようとするヤカラは風上にも置けんばばかり、日本人の軽薄をたしなめ？た。

時代錯誤もいいとこ、噴飯ものだけど、センスの一家言としておこう。しかし、テレビがそれを、いかにも痛快事であるかのように、だれにも一言も反論させず“放談”とはいえ、一方的に流したのはいただけない。

考えてもみるがいい。芸者制度というのは前近代的遺物である。だれもが好ましいとは思ってもいまい。出来ることなら、廃止してしまいたいのである。センスも言っていたが、悪のたれ流しの”待合政治“の例を思ってみることだ。(後略)

昭和48年5月28日

- ①「競艶！涙の別れ唄」 # 87
- ②菅原洋一、青江三奈、渚ゆう子、三善英史、ミュージカル・アカデミー
- ③不明
- ④詳細不明

昭和48年6月4日

- ①「競艶！股旅三度笠」 # 88
- ②橋幸夫、水前寺清子、ちあきなおみ、田端義夫
- ③「男なら」(不明)、「人生劇場」(不明)、「男の純情」(不明)、「潮来笠」(不明)、「鴛鴦道中」(不明)
- ④ベテラン田端義夫、円熟の橋幸夫、ファイター水前寺清子とお色気のちあきなおみと、いずれ劣らぬ”芸達者”を集め、歌はもとよりユーモアとウィットに富んだやりとりも楽しむという趣向で、演歌を特集する。

第一部は、きびしい男の人生航路をうたった傑作特集「これが男の生きる道」で、「男なら」「人生劇場」「男の純情」など。

第二部”藤原弘達歌謡放談”では田端の大ヒット、“船シリーズ”を聞きながら当時の世相と歌の関係を分析。

第三部は橋、水前寺、ちあきによる“競艶！股旅三度笠”で、「潮来笠」「鴛鴦道中」など、戦前戦後の股旅歌謡の代表作を総ざらいする。

昭和48年6月11日

- ①「石原裕次郎”魅惑の宵”」 # 89
- ②石原裕次郎、ダーク・ダックス、藤島桓夫、三浦洸一、岡本敦郎
- ③「赤いハンカチ」(石原)
- ④ 石原裕次郎が「赤いハンカチ」など全5曲を魅惑たっぷりに歌う他、藤島桓夫、三浦洸一、岡本敦郎がそれぞれのヒット曲を披露。

昭和48年6月18日

- ①「なつかしの歌謡ショー決定版！」 # 90
- ②淡谷のり子、小畑実、菅原都々子、三島敏夫
- ③不明
- ④ 東京・福岡・名古屋・北海道では、プロ野球「広島対巨人」を予定し、野球中止の場合に「にっぽんの歌」を放送するとしていた。当日はプロ野球が雨天中止となったため、「にっぽんの歌」を放送。大阪は「小柳ルミ子リサイタルマシガンB」という番組を放送した。

昭和48年6月25日

- ①「慕情！長崎の詩」 # 91
- ②霧島昇、春日八郎、美輪明宏、青江三奈、内山田洋とクール・ファイブ
- ③不明
- ④詳細不明

昭和48年7月2日

- ①「ああ大正の大演歌！」 # 92
- ②ディック・ミネ、水原弘、笹みどり、英亜里、田谷力三
- ③不明
- ④詳細不明

昭和48年7月9日

- ①「服部メロディ・青春の譜」 # 93
- ②服部良一、近江俊郎、二葉あき子、奈良光枝、菅原洋一、都はるみ、佐良直美
- ③「黒いパイプ」(近江)、「夜のプラットホーム」(二葉)、「青い山脈」(奈良)、「夢去りぬ」(菅原)、「東京ブギウギ」(不明)、「湯の町エレジー」(不明)

昭和48年

- ④ 作曲生活40年、戦前から現在に至るまで数々のヒット曲を世に出した服部良一をゲストに、“服部メロディー”を満喫する。

第一部“服部メロディ・青春の譜”では、奈良光枝の「青い山脈」、近江俊郎の「黒いパイプ」、二葉あき子の「夜のプラットホーム」、菅原洋一の「夢去りぬ」などのほか、服部を囲んで司会の山口淑子や出演歌手が歌にまつわる思い出や、時代背景を語り合う。また、「東京ブギウギ」に合わせ、山口淑子と菅原洋一がジルバを踊る。

第二部“藤原弘達歌謡放談・ブギウギ時代”では、終戦直後のブギウギ時代を切る。

昭和48年7月16日

- ①「御存知!!盛り場艶歌」 #94
②三波春夫、青江三奈、バーブ佐竹、和田弘とマヒナスターズ、殿さまキングス
③不明
④ 第一部は“ご存知!盛り場艶歌”の特集。

第二部は三波春夫を迎えての“藤原弘達歌謡放談”。

昭和48年7月23日

- ①「艶歌!花の饗宴」 #95
②橋幸夫、舟木一夫、三田明、市丸、神楽坂浮子、花村菊江
③「白虎隊」(橋・舟木・三田)
④ 第一部は橋幸夫、舟木一夫、三田明が、揃いの白虎隊の扮装で登場、歌と見事な剣舞を披露する“嗚呼!白虎隊”。古賀政男作曲の「白虎隊」を歌う他、詩吟の部分は三田が剣舞とともに朗詠。
第二部は市丸、神楽坂浮子、花村菊江の“艶歌!花の競演”。
第三部は、市丸をメインにした“藤原弘達歌謡放談・演歌事始”。

昭和48年7月30日

- ①「ご存知!ふるさと艶歌」 #96
②森光子、三橋美智也、島倉千代子、江利チエミ、五木ひろし
③「東京下町あたり」(森)、「夕焼けとんび」(三橋)、「りんどう峠」(島倉)、「山は夕焼け」(五木)
④ 歌に自信のある森光子が”歌手”として出演、三橋美智也の三味線伴奏で民謡を歌うほか、最近レコーディングした新曲「東京下町あたり」を聞かせる。
第一部“ご存知!ふるさと艶歌”では、三橋の「夕焼けとんび」、島倉千代子の「りんどう峠」、五木ひろしの「山は夕焼け」などを特集。

第二部”藤原弘達歌謡放談”では、藤原が最近”ふるさと”を安売りしている傾向に批判を加えた後、出演者たちがふるさとにちなんだ名曲を歌う。

昭和48年8月6日

- ①「任侠艶歌十八番！」 #97
- ②北島三郎、フランク永井、都はるみ、ピンキー、山田太郎
- ③「東京下町あたり」(森)
- ④ 歌い慣れぬ演歌に挑戦する、フランク永井とピンキーの熱演がみもの。
夏休み中の山口淑子に代わって代理で司会を務めた森光子も、新曲「東京下町あたり」を歌う。

昭和48年8月13日

- ①「ああ軍歌！」 #98
- ②藤山一郎、アイ・ジョージ、春日八郎、青江三奈、ペギー葉山
- ③「若鷺の歌」(藤山)、「燃ゆる大空」(藤山)、「戦友」(ジョージ)、「暁に祈る」(春日)、「可愛いスーチャン」(青江)、「空の神兵」(ペギー)
- ④ 夏休み中の山口淑子に代わって、前司会者の高島忠夫が登場、藤原弘達とのコンビで軍歌特集を放送する。

第一部は戦意高揚を目的に作られた軍歌を集めた”ああ軍歌”。曲は「若鷺の歌」「燃ゆる大空」を藤山一郎、「空の神兵」をペギー葉山、「暁に祈る」を春日八郎など。

続く第二部“藤原弘達歌謡放談・名もなき兵士の唄”では、戦争の非情さ、兵士の悲しみ、戦争批判を歌に託した”反戦的軍歌”を集める。青江三奈の「可愛いスーチャン」やアイ・ジョージの「戦友」など。

昭和48年8月20日

- ①「100回記念特集「勢揃い！紅白歌まつり」(前編)」 #99
- ②加東大介、高島忠夫、霧島昇、渡辺はま子、近江俊郎、三橋美智也、岡本敦郎、五月みどり、松山恵子、並木路子、菅原都々子、菊池章子
- ③「山小舎の灯」(近江)、「高原列車は行く」(岡本)、「未練の波止場」(松山)、「リンゴの唄」(並木)、「星の流れに」(菊池)
- ④ 放送百回記念特集として、これまでこの番組で活躍してきたベテラン歌手28人が出演して”紅白歌まつり”を二週にわたり繰り広げる。

また、初代と二代目の司会者、加東大介、高島忠夫もゲスト出演し、山口淑子、藤原弘達の現司会者と歌謡曲よもやま話をする。

記念パーティー会場になったスタジオに、お祝いに駆け付けた歌手が次々に歌うという趣向で、岡本敦郎の「高原列車は行く」、松山恵子の「未練の波止場」などのヒット曲の他、敗戦直後を彩った並木路子の「リンゴの唄」、近江俊郎の「山小舎の灯」、菊池章子の「星の流れに」などで、戦後の思い出を綴る。

昭和48年

昭和48年8月27日

- ①「100回記念特集「勢揃い！紅白歌まつり」(後編)」 #100
- ②加東大介、高島忠夫、天地聡子、宮尾たか志、ディック・ミネ、二葉あき子、市丸、フランク永井、奈良光枝、三浦洸一、黒沢明とロス・プリモス、藤島桓夫、松尾和子、若山彰
- ③「都々逸」(加東)、「PAPA LOVES MAMBO」(高島)、「赤い靴のタンゴ」(奈良)、「月の法善寺横町」(藤島)、「喜びも悲しみも幾歳月」(若山)
- ④ 先週に引き続き、放送百回記念特集”紅白歌まつり”の後編。
戦後の歌謡史を紐解くという形式で、奈良光江の「赤い靴のタンゴ」、藤島桓夫の「月の法善寺横町」、若山彰の「喜びも悲しみも幾歳月」など、往年のヒット曲を綴りながら、その時々時代の背景を回顧する。
また、特別ゲストの加東大介は都々逸を、高島忠夫は「PAPA LOVES MAMBO」を、それぞれお祝いに歌う。

昭和48年9月3日

- ①「東京の屋根の下、唄は流れる」 #101
- ②灰田勝彦、天知茂、ちあきなおみ、ダーク・ダックス、灰田有紀彦
- ③「燦めく星座」(灰田)、「上海ブルース」(天知)、「赤いグラス」(天知)、「昭和ブルース」(天知・ちあき)「真白き富士の嶺」(ダーク)、「椰子の実」(ダーク)、「旅愁」(ダーク)、「北上夜曲」(ダーク)
- ④ 天知茂が歌手として出演し「上海ブルース」「赤いグラス」などを歌い、ちあきなおみとは「昭和ブルース」を歌う。昔の歌しか知らぬという天知に調子を合わせ「若い時の歌ほどよく覚えてるもの」とやったちあき。あとから司会者に「ちあきさん、おいくつ？」とからかわれ、照れることしきり。
灰田勝彦は、実兄有紀彦のスチールギター演奏で「燦めく星座」を聞かせる。
“藤原弘達歌謡放談”は、昔の女学生と現在の女子中学・高校生の学生気質の変遷を語り、藤原らの世代のアコガレの的だったセーラー服の女学生たちが愛唱した歌をダーク・ダックスが歌う。曲は「真白き富士の嶺」「椰子の実」「旅愁」「北上夜曲」など。

昭和48年9月10日

- ①「対決！演歌三本勝負」 #102
- ②坂本九、ぴんから兄弟、殿さまキングス、由紀さおり、三沢あけみ、三浦布美子、不明
- ③「洒落男」(坂本)、「うちの女房にゃ髭がある」(坂本・三沢)、「野崎小唄」(由紀)、「涙の渡り鳥」(三沢)、「お江戸日本橋」(三浦)、「十三夜」(三浦)、「ああそれなのに」(不明)
- ④ ぴんから兄弟と殿さまキングスの東西人気グループが演歌合戦を展開。また、坂本九、由紀さおり、三沢あけみらが「ああそれなのに」ほかのなつかしいコミックソングの数々を聴かせる。更に、特別ゲスト三浦布美子が日本情緒たっぷりの歌と艶姿を披露する。
また、坂本の「洒落男」、坂本・三沢の「うちの女房にゃ髭がある」など、なつかしのコミックソングの合間に、藤原弘達がコミックソングの本質と日本人の笑いの構造を分析してみせる。

昭和48年9月17日

①「演歌・マドロス人生」 #103

②ディック・ミネ、水前寺清子、美川憲一、にしきのあきら、デューク・エイセス

③「奥様お手をどうぞ」(ディック)、「別れ船」(水前寺)、「港町十三番地」(美川)

④ 第一部はマドロスものの演歌で、水前寺清子の「別れ船」、美川憲一「港町十三番地」など。

第二部は終戦直後人気を博した三木鶏郎グループの冗談音楽をデューク・エイセスが歌う。

「昭和22年の冬から放送された歌で、当時の世相を皮肉った三木鶏郎の冗談音楽を知っていますか。」当番組出演の歌手に控室で聞いて回っていた司会の藤原弘達に水前寺清子は、「あら、おじさま、私、まだ生まれていませんでしたワ。」ところが、ディック・ミネの「あれから20数年、いま冗談音楽を聞いても通用するね。政治は進歩していないということだね」に、二人は意気投合。

第三部はディック・ミネ特集。司会の山口淑子をエスコートしながら「奥様お手をどうぞ」などを披露、青春時代の思い出を語る。

昭和48年9月24日

①「石原裕次郎ビッグヒットを唄う」 #104

②森昌子、石原裕次郎、伊東ゆかり、佐良直美、藤圭子、

③「故郷」(藤原)

④ 当番組で藤原弘達のはじめての渋い(?)を披露する。”絶対に私を歌わせない”という約束をとりつけての司会者出演であったが、”先生腰をあげて”と山口淑子からハッパをかけられたりして、一声あげねばならぬ羽目となったもの。伊東ゆかり、佐良直美、森昌子、藤圭子らにひっぱり出され”アイン・ツバイ・ドライ(一、二、三)ハイ”と「故郷」を歌ったが、これを見た山口、「先生の歌はみんな寮歌に聞こえますね」。

昭和48年10月1日

①「田端義夫・涙の絶唱」 #105

②田端義夫、青江三奈、ちあきなおみ、西来路ひろみ、ミュージカル・アカデミー

③不明

④詳細不明

昭和48年10月8日

①「競演! 魅惑のロマン歌謡」 #106

②藤山一郎、アイ・ジョージ、尾崎紀世彦、ペギー葉山、弘田三枝子

③「椰子の実」(藤山)、「紀元二千六百年」(藤山)、「三日月娘」(藤山)、「硝子のジョニー」(ジョージ)、「また逢う日まで」(尾崎)、「あいつ」(尾崎)、「爪」(ペギー)、「人形の家」(弘田)、「ベッドで煙草を吸わないで」(弘田)

④ 第一部はポピュラー出身のペギー葉山、弘田三枝子、尾崎紀世彦、ラテン出身のアイ・ジョージらが、いわゆる演歌調とは対照的なロマンの香りのただよ歌謡曲を聞かせる「競演! 魅惑のロマン歌

昭和48年

謡」。曲目はジョージが「硝子のジョニー」、弘田が「人形の家」と「ベッドで煙草を吸わないで」、尾崎が「また逢う日まで」と「あいつ」、ペギーが「爪」ほか。

第二部“藤原弘達歌謡放談・ああ国民歌謡”では、戦前から戦中にかけて流行し戦意高揚の手段にも使われた”なつかしの国民歌謡”「椰子の実」「紀元二千六百年」などを藤山一郎が歌い、その時代背景を藤原弘達が解説する。

昭和48年10月15日

①「浩吉・美和父娘三度笠」 #107

②高田浩吉、高田美和、春日八郎、渡辺はま子、松尾和子、八代亜紀

③「白鷺三味線」(浩吉)、「大江戸出世小唄」(浩吉)、「むらさき仁義」(浩吉)、「鴛鴦道中」(浩吉)、「むらさき仁義」(美和)、「裏町人生」(春日)、「あん時やどしや降り」(春日)、「愛国の花」(渡辺)、「ああモンテンルパの夜は更けて」(渡辺)

④ 第一部は10月にリサイタルをする春日八郎の”裏町もの”。

第二部は、高田浩吉、美和の親子が特別ゲストとして出演。娘を嫁がせる父親の心境を語りながら、浩吉がヒット曲を歌う。関西歌舞伎の片岡秀太郎と愛娘の挙式を前にした浩吉はいつになくソワソワと落ち着かぬ体だが、美和自身は「お父さまの声はいつ聞いても素敵」と親を冷やかすほど。司会の山口淑子から「おめでとうございます。お父さまのために何か歌って」と言われ「むらさき仁義」を披露、うるんだ目の浩吉と対照的なところを見せていた。

第三部”藤原弘達歌謡放談”は、”ウーマン・パワー事始”日本女性のシンの強さを示した歌を、11月にリサイタルをする渡辺はま子が歌う。

昭和48年10月22日

①「演歌・花の道中双六」 #108

②春日八郎、橋幸夫、水前寺清子、ちあきなおみ、大川栄策、黒島健司

③「お富さん」(春日)、「別れの一本杉」(春日)、「浮草の宿」(春日)、「花の三度笠」(橋)、「勘太郎月夜唄」(ちあき)、「目ン無い千鳥」(大川)、「ここに幸あり」(黒島)

④ 今回は、春日八郎、橋幸夫、水前寺清子、ちあきなおみらお馴染みのメンバーに加え、リバイバル曲を専門に歌って”かくれた人気歌手”と言われる大川栄策、黒島健司の二人が出演、「目ン無い千鳥」、「ここに幸あり」など往年の名曲を歌いまくる。

第一部は、いわゆる股旅ソングを集めた“演歌・花の道中双六”で、橋、ちあきが「花の三度笠」「勘太郎月夜唄」などを歌う。

第二部は“藤原弘達歌謡放談・歌の風俗史”で、春日が「お富さん」「別れの一本杉」「浮草の宿」など、ヒット曲を年代順に披露する傍ら、その時代の世相を藤原弘達が解説する。

昭和48年10月29日

- ①「ハモニカ・演歌大競演！！」 #109
- ②春日八郎、島倉千代子、都はるみ、菅原洋一、宮田東峰、ミヤタ・ハーモニカバンド
- ③「この世の花」(島倉)、「涙の連絡船」(都)、「丘を越えて」(バンド)
- ④ 春日八郎、島倉千代子、菅原洋一、都はるみらが懐かしの抒情歌謡と演歌を聞かせる。

他にハーモニカ一筋に60年の宮田東峰が出演、ハーモニカ・バンドを前になつメロを指揮する他、ハーモニカにまつわるエピソードを紹介する。

宮田が自分の顔を商標登録した話、ハーモニカの発達史を語った後、バンドの演奏で「丘を越えて」の他、島倉千代子が「この世の花」、都はるみが「涙の連絡船」など、それぞれのヒット曲を歌う。

久しぶりのスタジオで「昔にくらべライトが強くなりましたね」と汗をかきっぱなしの東峰だったが、司会の山口淑子を見ると「美女に会うと緊張してひや汗が……」と今度は別の表現。藤原弘達に「ライトじゃなかったの？」と半畳を入れられ、「女性は光、この年になっても美女は七色に見えます」。

昭和48年11月5日

- ①「饗宴！艶歌日本調」 #110
- ②市丸、榎本美佐江、藤本二三代、三沢あけみ、笹みどり、英亜里、和田弘とマヒナスターズ
- ③「天国に結ぶ恋」(和田弘とマヒナスターズ)、「好きだった」(和田弘とマヒナスターズ)、「木遣りくずし」(不明)、「野崎小唄」(不明)、「湯島の白梅」(不明)、「明治一代女」(不明)
- ④ 大ベテラン市丸を筆頭に、榎本美佐江、藤本二三代、三沢あけみ、笹みどり、英亜利、和田弘とマヒナスターズが揃い、懐かしの日本調歌謡曲ヒットパレードを繰り広げる。曲は「野崎小唄」「湯島の白梅」「明治一代女」ほか。

また、「藤原弘達歌謡放談」は「天国に結ぶ恋」「好きだった」など、和田弘とマヒナスターズによる失恋の歌を特集する。

昭和48年11月12日

- ①「軍歌・ああ同期の桜」 #111
- ②霧島昇、近江俊郎、岡本敦郎、若山彰、織井茂子、ボニージャックス
- ③「愛国行進曲」(霧島)、「異国の丘」(不明)、「きけわだつみの声」(不明)
- ④ 霧島昇、近江俊郎、若山彰らの出演で、軍歌を中心に戦中・戦後の歌を特集する。

今回は、歌の合間に元水兵の霧島がもっぱら将兵慰問に明け暮れた戦争体験を語る他、学徒出陣三十年にちなみ、特攻隊に編入された学徒兵、空母に突入する特攻機のフィルムなども紹介し、歌と戦中・戦後の生活を振り返る。

第一部は霧島の「愛国行進曲」など。

第二部は「異国の丘」「きけわだつみの声」など戦争に関連した庶民の悲しみと怨念のこもった歌と、当時の話題を。

昭和48年

昭和48年11月19日

①「挑戦！演歌・艶歌・怨歌」 #112

②フランク永井、北島三郎、天知茂、ぴんから兄弟、藤圭子

③「兄弟仁義」（ぴんから兄弟）

④ 今回は、フランク永井、天知茂、北島三郎、ぴんから兄弟といったつわ者たちに、紅一点の藤圭子を加えた異色顔合わせで送る。

第一部“挑戦！演歌・艶歌・怨歌”では、ぴんから兄弟の宮史郎が、北島の「兄弟仁義」に挑む。

第二部は、フランクと天知のコーナーで、互いの人生観や仕事への情熱を語り合う。

昭和48年11月26日

①「あゝ、さすらい大演歌」 #113

②三橋美智也、加藤登紀子、水前寺清子、三田明、渚ゆう子

③「石狩川悲歌」（三橋）、「知床旅情」（加藤）、「愛のくらし」（加藤）

④ 出産で休養していた加藤登紀子を久しぶりにゲストに迎える。お得意のギターの弾き語り「知床旅情」や新曲「愛のくらし」などを歌う。この曲は加藤が作詞し、アルフレッドハウゼが曲をつけたもので、今年の夏あたりから、北海道でヒットし始めた。

“藤原弘達歌謡放談”は「現代母親考」。「母さんの歌」「母恋吹雪」「悲しき子守唄」「九段の母」など母親をテーマにした曲を中心に、歌謡曲にあらわれた母の姿を探る。また、加藤登紀子が、母になった感想や体験を話す。

三橋美智也も「石狩川悲歌」などをたっぷり歌う。

昭和48年12月3日

①「高峰三枝子愛を唄う」 #114

②高峰三枝子、石原裕次郎、ダーク・ダックス

③「宵待草」（高峰）、「湖畔の宿」（高峰）、「小雨の丘」（高峰）、「二人の世界」（高峰・石原）、「貴方なしでは」（高峰・石原）、「粋な別れ」（高峰・石原）、「夜霧よ今夜もありがとう」（不明）、「ペチカ」（不明）、「ともしび」（不明）、「旧友」（不明）

④ 今回は戦前派、戦後派の違いこそあれ、ともに”歌う映画スター”の代表的存在として、数多くのヒット曲を持つ高峰三枝子と石原裕次郎を迎え、更に近頃ますます円熟味を増したダーク・ダックスを加えた豪華メンバーで送る。

第一部は高峰のヒット曲特集。久しぶりに会う山口淑子とのおしゃべりをはさみ「宵待草」「湖畔の宿」「小雨の丘」などを披露。

第二部は高峰と石原のデュエットで、「二人の世界」「貴方なしでは」「粋な別れ」などを歌う。

“藤原弘達放談”は竹久夢二と大正センチメンタリズム。

昭和48年12月10日

- ①「絶唱・愛・涙・別れ」 #115
- ②小林旭、島倉千代子、雪村いづみ、守屋浩、克美茂
- ③「船頭小唄」(小林)、「花はどこへいった」(雪村)、「約束」(雪村)
- ④ 第一部は島倉千代子ほか出演歌手のヒット曲で綴る”絶唱・愛・涙・別れ”の歌。

この後、特別ゲスト小林旭が「船頭小唄」などナツメロを独特の”アキラぶし”でたっぷり聞かせるなつメロ・コーナー。

続いて、雪村いづみが反戦歌の傑作「花はどこへいった」「約束」を歌う反戦歌コーナー。雪村は、小川俊彦のピアノソロで「約束」を歌う。—ママを失った子どもが、その翌年、戦争でパパをなくす。ママが死んだとき子どもはパパと約束した。”強くなる、決して泣かない”そして、今度も子どもは”約束”を守る—。雪村はこの歌を歌うと涙を浮かべる。

同年12月20日付毎日新聞東京版朝刊に、「“本当の歌”を感じる」とのタイトルで、視聴者からの感想が以下のとおり掲載された。

NETテレビ10日「にっぽんの歌」で、雪村いづみさんの歌った「約束」に“本当の歌”ともいえるものを感じた。ゼスチュアとカッコよさを売物にする最近の歌手たちに、あの情感たっぷりの歌が歌えるだろうか。

昭和48年12月17日

- ①「鶴田浩二・男の哀愁」 #116
- ②鶴田浩二、淡谷のり子、都はるみ、菅原洋一、克美茂
- ③「ハワイの夜」(鶴田)、「街のサンドイッチマン」(鶴田)、「赤と黒のブルース」(鶴田)、「夜霧のブルース」(鶴田)、「別れのブルース」(淡谷・鶴田)、「雨のブルース」(淡谷)
- ④ 男の哀愁を歌い続けて二十年の鶴田浩二と、”ブルースの女王”淡谷のり子の大ベテラン二人を特別ゲストに迎え、ほかに都はるみ、菅原洋一らのメンバーで送る。

第一部は「ヒット曲集」、第二部は「鶴田浩二・男の哀愁」、第三部は「ブルース談義」を展開。

鶴田は「ハワイの夜」「街のサンドイッチマン」「赤と黒のブルース」を歌う。また、独特のポーズのいわれ、歌い始めた動機などについて話す。

淡谷は「雨のブルース」などを歌うほか、鶴田を交えてブルース談義を展開する。途中、鶴田に先輩ディック・ミネから「夜霧のブルース」を歌ってほしいとの突然の電話が入り、リクエストに感激しながら「夜霧のブルース」を哀愁をこめて披露。

最後は、「別れのブルース」を、一番を淡谷が、二番を鶴田がそれぞれ歌う。

昭和48年12月24日

- ①「競演！おんなの流行歌」 #117
- ②榎山文枝、朝丘雪路、伊東ゆかり、青江三奈、和田アキ子、曾根幸明、克美茂
- ③「五木の子守唄」(榎山)
- ④ 朝丘雪路、伊東ゆかり、青江三奈、和田アキ子らの出演で、歌で綴る”戦後女性風俗史”を展開。また、このほど「私の子守唄」というLPを出し歌手の仲間入り？とうわさされた民芸の榎山文枝

昭和48～49年

が”歌手”として初出演、熱のこもったナレーションを交えて「五木の子守唄」などを披露する。テレビで歌うのは初めてで、おまけにベテラン歌手に囲まれてあがりっぱなし。マイクの前に立ったとたん足はガクガク、体はブルブル。

昭和48年12月31日

①「'73年ハイライト・栄光の歌声」 #118

②ディック・ミネ、高峰三枝子、鶴田浩二、加藤登紀子、田端義夫、渡辺はま子、藤山一郎、都はるみ、富永一朗、戸川昌子、殿さまキングス、並木ひろしとタッグマッチ

③不明

④ マンガ家富永一朗、作家の戸川昌子を特別ゲストに迎える。

第一部は“73年のハイライト特集”で、今年この番組で話題になった場面をビデオで再現、司会の山口淑子、藤原弘達、ゲストの富永、戸川が大いに歌を語り、人生を論じる。

第二部は、殿さまキングス、並木ひろしとタッグマッチらの出演で“年忘れリクエスト合戦”。

昭和49年1月7日

①「演歌の真髄！花の三人衆」 #119

②三波春夫、北島三郎、水前寺清子

③不明

④ 三波春夫、北島三郎、水前寺清子の演歌三エースが新年のあいさつ。

“サブちゃんとチータのまた旅演歌名曲集”と“三波春夫ヒット曲集”、その後、タキシード、マキシ姿でヒット曲パレード。

昭和49年1月14日

①「競演！なみだ唄別れ唄」 #120

②水原弘、西郷輝彦、ちあきなおみ、八代亜紀、ディック・ミネ

③不明

④ 八代亜紀らで、なみだ唄、別れ唄の競演。司会の藤原弘達が、新著「藤原弘達人生ルポ・失恋のすすめ」にちなんで、失恋の思い出を語る。

昭和49年1月21日

①「マドロス演歌決定版！」 #121

②田端義夫、藤島桓夫、松山恵子、藤圭子、ぴんから兄弟

③「麦と兵隊」(田端)、「カタカナ忠義」(田端)、「玄海ブルース」(不明)

④ 第一部はマドロス姿で登場した藤島桓夫、藤圭子、ぴんから兄弟らが繰り広げる“マドロス演歌決定版”。マドロスものがヒットした年には、海や船の大事故が起きているという因縁話も出る。

第二部は“田端義夫思い出の戦時歌謡”で「麦と兵隊」「カタカタ忠義」などを歌う。

昭和49年1月28日

- ①「望郷・ふるさと演歌」 #122
- ②春日八郎、三橋美智也、島倉千代子、青江三奈、東京ロマンチカ
- ③「山の吊橋」(春日)、「雪国の女」(春日)、「おさげと花と地藏さんと」(三橋)、「りんどう峠」(島倉)
- ④ 「望郷・ふるさとの歌」の特集。昨年秋のリサイタル「演歌とは何だろう」で芸術祭大賞を受けた春日八郎を特別ゲストに迎える他、三橋美智也、島倉千代子、青江三奈、東京ロマンチカなどベテランを揃え、二部構成でそれぞれのヒット曲を送る。
第一部“望郷・ふるさと演歌”では、島倉が「りんどう峠」、三橋が「おさげと花と地藏さんと」、春日が「山の吊橋」などを歌い、故郷の思い出を語る。
続く第二部”藤原弘達歌謡放談”は、春日、島倉らのデビュー曲紹介と当時の世相を解説。

昭和49年2月4日

- ①「美空ひばり忘れじの歌」 #123
- ②美空ひばり、ディック・ミネ
- ③「私は街の子」(美空)、「港町十三番地」(美空)、「柔」(美空)、「悲しい酒」(美空)、「波止場だよお父つあん」(美空)、「ある女の詩」(美空)、「旅姿三人男」(美空)、「悲しき口笛」(美空)、「黒い微笑」(美空)、「旅姿三人男」(ディック)
- ④ 美空ひばりのヒット曲で綴る戦後史。
初共演のディック・ミネとのデュエットを交え、「悲しき口笛」から久々の新曲「黒い微笑」まで十三曲を歌い上げる。
三部構成で、美空、ディックのヒット曲と、美空のヒット曲を年代順に聞きながら、時代背景を藤原弘達が分析してゆく。
曲は「私は街の子」「港町十三番地」「柔」「悲しい酒」「波止場だよお父つあん」「ある女の詩」ほか、デュエットで「旅姿三人男」。

昭和49年2月11日

- ①「サブちゃんのはるみのおしどり道中」 #124
- ②北島三郎、都はるみ、フランク永井、松尾和子、霧島昇
- ③「鴛鴦道中」(北島・都)、「名月赤城山」(北島)、「兄弟仁義」(北島)、「はるみの三度笠」(都)、「君待てども」(フランク)、「涙の乾杯」(フランク)、「東京ナイトクラブ」(フランク・松尾)、「ワン・レイニィナイト・イン・東京」(松尾)、「旅の夜風」(霧島昇)
- ④ 演歌の人気者、北島三郎と都はるみ、ムード歌謡のベテラン、フランク永井と松尾和子、そして特別ゲストに霧島昇というバラエティーに富んだ顔ぶれで”歌うカップル”をテーマに戦前戦後のヒットメロディーを特集。
第一部は、北島、都の出演で“サブちゃん、はるみのおしどり道中”。二人のデュエット「鴛鴦道中」をはじめ、北島が「名月赤城山」「兄弟仁義」、都が「はるみの三度笠」などを歌う。
第二部は”藤原弘達歌謡放談”。特別ゲストに霧島を迎え、戦前大ヒットさせた「旅の夜風」などを聞きながら、当時の社会情勢などを藤原が解説する。

昭和49年

第三部は“フランク、松尾、都会の夜を歌う”。フランクが「君待てども」「涙の乾杯」を、松尾が「ワン・レイニィナイト・イン・東京」を歌う。また、デュエットで「東京ナイトクラブ」を。

昭和49年2月18日

- ①「大勝負・男の演歌」 # 1 2 5
- ②五木ひろし、春日八郎、村田英雄、畠山みどり、遠藤実
- ③「男なら」(五木)、「いっぽんどっこの唄」(春日)、「王将」(村田)、「出世街道」(畠山)、「星影のワルツ」(遠藤)、「浅草姉妹」(遠藤)
- ④ 五木ひろし、春日八郎、病癒えてカムバックした村田英雄、畠山みどりらに加え、最近LPを吹き込んだ作曲家遠藤実が新人歌手として出演、演歌の精神を語る。
まず、“大勝負・男の演歌”で村田が「王将」、畠山が「出世街道」、五木が「男なら」、春日が「いっぽんどっこの唄」などを歌う。
続いて”藤原弘達歌謡放談”で、遠藤が自作の「星影のワルツ」や「浅草姉妹」を歌う。

昭和49年2月25日

- ①「栄光のビッグヒット」 # 1 2 6
- ②島倉千代子、近江俊郎、小畑実、奈良光枝、三浦洸一、菅原都々子、大津美子
- ③「緑の地平線」(近江)、「勘太郎月夜唄」(小畑)、「赤い靴のタンゴ」(奈良)、「東京の人」(三浦)、「サーカスの唄」(三浦)、「マロニエの木陰」(大津)
- ④ 昭和20年代から30年代にかけてのヒット曲を中心に、ベテラン歌手七人が競演する。
第一部は「栄光のビッグヒット」で、歌い終わった歌手が次の人の司会を務めるリレー司会が見ものの。
第二部は昭和初期のヒット曲を集めた”藤原弘達歌謡放談”。三浦洸一が「サーカスの唄」、近江俊郎が「緑の地平線」、大津美子が「マロニエの木陰」を歌い、藤原が当時の時代背景を解説する。

昭和49年3月4日

- ①「ああ青春に涙あり」 # 1 2 7
- ②橋幸夫、坂本九、佐良直美、ちあきなおみ、藤山一郎
- ③「いつでも夢を」(橋)、「丘を越えて」(佐良)、「青い山脈」(藤山)
- ④ 橋幸夫、坂本九、佐良直美、ちあきなおみ、それに特別ゲストに藤山一郎を迎え、明治から現代までの青春ソングを特集する。
第一部は“ああ青春に涙あり”で、曲は橋の「いつでも夢を」、佐良の「丘を越えて」ほか。
第二部“歌謡放談”では藤山が「青い山脈」ほかの青春歌謡三部作を歌い、時代背景を藤原弘達が解説。
第三部は“明治の青春ソング”。

昭和49年3月11日

- ①「石原裕次郎・夜のロマンを歌う」 #128
- ②石原裕次郎、青江三奈、和田弘とマヒナスターズ、黒沢明とロス・プリモス
- ③「夜霧よ今夜も有難う」（石原）、「港町・涙町・別れ町」（石原）、「銀座の恋の物語」（石原・青江）、「酒は涙か溜息か」（石原）
- ④ 石原裕次郎、青江三奈、マヒナスターズ、ロス・プリモスら”夜のムード派”歌手が、それぞれのヒット曲を披露する。

第一部“石原裕次郎夜のロマンを歌う”では、石原が「夜霧よ今夜も有難う」「港町、涙町、別れ町」や、青江とデュエットで「銀座の恋の物語」など、石原のヒット曲の数々。

第二部では、マヒナスターズとロス・プリモスが”夜のムード派”競演。また、石原が「酒は涙か溜息か」など古賀メロディーで締めくくるのも話題。

昭和49年3月18日

- ①「夜の盛り場流し唄」 #129
- ②青江三奈、内山田洋とクール・ファイブ、藤圭子、田端義夫、阿部徳二郎、渡辺栄三
- ③「盛り場ブルース」（不明）、「国境の町」（不明）、「島育ち」（田端）、「大利根月夜」（田端）
- ④ 演歌のベテラン田端義夫を始め、青江三奈、内山田洋とクール・ファイブ、藤圭子ら演歌歌手の顔合わせ。

第一部は青江、藤、クール・ファイブによる「夜の盛り場流し唄」で、曲は「盛り場ブルース」ほか。

第二部は”藤原弘達歌謡放談”で、ゲストに流し生活三十年の阿部徳二郎を招き、流しの生活あれこれやリクエストの変遷を聞く。曲は「国境の町」ほか。

第三部は“田端義夫ヒット曲コーナー”で、田端が「島育ち」「大利根月夜」などを歌う。

昭和49年3月25日

- ①「艶姿花の恋唄」 #130
- ②三橋美智也、三浦布美子、市丸、榎本美佐江、笹みどり、大月みやこ
- ③「湯島の白梅」（三浦・市丸・榎本）、「お駒恋姿」（大月）、「お夏清十郎」（笹）、「十三夜」（三橋）
- ④ 今夜は趣向を凝らして日本調歌絵巻を披露する。ベテラン市丸を筆頭にあでやかな和服姿の三浦布美子、榎本美佐江、大月みやこ、笹みどりが勢揃い。”黒一点”？の三橋美智也を交え、おなじみの曲を聞く。

まず“艶姿花の恋唄”と題し三浦、榎本、市丸が「湯島の白梅」、大月が「お駒恋姿」、笹が「お夏清十郎」、三橋が「十三夜」などを歌う。ほかに幕末にちなんだ歌を披露したり、「むらさき小唄」「祇園小唄」など”〇〇小唄”とつく歌を特集する。歌の合間に、日本髪の種類や衣装選びの苦心談が語られる。女性にとっては興味あるところ。

”藤原弘達歌謡放談”は、歌謡曲の原点とも言われる「トンヤレ節」の解説。

数人の美女に囲まれてご機嫌なのは司会の藤原弘達。「春宵一刻値千金。こんな番組なら毎日でもいいね」に、ゲストの三浦は「でも先生、肝心のものが抜けているんじゃないやありません？」「いやあ、

昭和49年

よくわかって下さった。灘の生一本の味というところですか。あなたの手でシャクを一つ……」と
弘達先生、わるのり。

昭和49年4月1日

- ①「演歌！旅…そして別れ」 # 1 3 1
- ②尾崎紀世彦、北島三郎、ペギー葉山、ダーク・ダックス
- ③不明
- ④詳細不明